シンデレラマン

2005(平成17)年６月23日鑑賞〈梅田ピカデリー〉　★★★★★

監督・製作＝ロン・ハワード／出演＝ラッセル・クロウ／レニー・ゼルウィガー／ポール・ジアマッティ／クレイグ・ビアーコ／ブルース・マッギル（ブエナ　ビスタ　インターナショナル（ジャパン）配給／2005年アメリカ映画／144分）

……前途有望なボクサーだった主人公も、身体の故障と1930年代の大恐慌の中、電気代にもコト欠く生活に。そのうえ、無気力試合（？）によりライセンスも剥奪。しかし、そこから奇蹟が……。それは「ミルクのため」「家族のため」、そんな平凡だが強い願いが生んだ奇蹟……。不遇の時代、見放された状況下においてこそ、男の真の力量が明らかになる、そんな思いを強くさせる感動作！　「潜水艦モノにはずれなし」だけではなく、「ボクシング映画にはずれなし」という格言を新たにつけ加えなければ……？

潜水艦モノとボクシングもの

「潜水艦映画にはずれなし」とよく言われるが、まさにそのとおり。「潜水艦モノ」に名作が多いのは、「密室」から生まれる緊張感と、良くも悪くも生死をかけた人間の本性が露呈されるため、真の人間ドラマが描かれるからだ。しかしこの映画を観ると、私は新たに「ボクシング映画にはずれなし」という格言をつくる必要があると思う。『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）はボクシング映画ではなく「人間ドラマ」だということはその評論で書いたが、ボクシング映画の名作中の名作は、何といっても『ロッキー』１～５。

ボクシング映画のパターンは、「四角いジャングル」と呼ばれるリング上での過酷で孤独な闘いと、それを支える家族愛や師弟愛と相場が決まっているが、それがわかっていてもやはりボクシング映画には感動させられるものが多い。『ロッキー』は、ロッキー（シルベスター・スタローン）とエイドリアン（タリア・

シャイア）との夫婦愛が感動の原点だったが、『シンデレラマン』のそれは家族愛。アメリカでも日本でも失われつつある「家族の絆」が実に感動的に描かれたボクシング映画の名作誕生だ。

「暗黒の木曜日」は1929年10月24日

1914年に起こった第１次世界大戦が終了したのは1918年。それによってドイツは悲惨な状態となり、それがその後のナチス・ドイツ台頭の１つの要因となったことはよく知られている。しかし戦勝国のアメリカではその時代保守主義が強まって無政府主義者や共産主義者の取締まり＝「アカ狩り」が進められる中、1920年からは「禁酒法」が施行された（1933年に廃止）。

これは飲酒そのものを禁止するのではなく、酒の製造・販売・運搬を禁ずる法律だったが、その密売のために有名なアル・カポネを中心とするギャングが幅をきかせる時代となっていった。禁酒法によって、経済恐慌が生まれたわけではなく、むしろ1920年代のアメリカは禁酒法のもとで経済好況を謳歌していたが、他方で禁酒法廃止を求める運動も1929年からは強まっていった。

そんなアメリカを突如襲ったのが、1929年10月24日のニューヨーク株式市場（ウォール街）における株の大暴落。パンフレットによれば、「暗黒の木曜日」と呼ばれたこの日、普通株の40％がただの紙切れと化し、多くの人が一夜にして、貯蓄、仕事、家など、財産を失った。

その後もアメリカ経済は悪化の一途をたどり、史上最大規模の世界恐慌に発展。閉鎖された銀行は１万行にも達し、ついに1932年には、４人に１人が失業するという時代が訪れた、と書かれている。これによって1930年代初頭のアメリカは、失業者があふれ返る大不況時代に突入したわけだ。

その頃の日本は？

1895年の日清戦争の勝利、1905年の日露戦争の勝利に続いて、第１次世界大戦でも日英同盟を基盤としていた日本は戦勝国の立場に……。ところが、大正デモクラシーの時代が終わり、1926年から昭和の時代に突入した日本でも、アメリカの大恐慌の影響を受けて1927（昭和２）年３月には金融恐慌が始まり、５月には

中国の山東省への出兵によってきな臭い匂いがただよい始めた。そして国内においては、日本共産党の大弾圧や東北地方の冷害による米飢饉、そしてそれに伴う娘の身売りなど「暗い時代」へと突き進んでいった。そして、1931年９月18日の柳条湖事件。それ以降、日本では一層の軍国主義化が進み、1937年８月13日の上海事変による日中戦争、そして1941年12月８日の真珠湾攻撃による太平洋戦争へと拡大していった。

このように、1930年前後の時代は、アメリカも日本もその後の国の方向を決めるターニングポイントとなった重要な時代。まずそのことを十分に理解しておく必要がある。

ジム・ブラドックは実在のボクサー

『ロッキー』は架空の人物だが、この映画の主人公ジム・ブラドックは1906年生まれの実在のボクサー。19歳でデビューした彼は順調に出世街道を歩み、1929年、彼が23歳の時にライトヘビー級の世界タイトルマッチ戦に挑んだが負傷して惨敗。これが彼の挫折の始まりとなった。

そしてその年に始まった大恐慌のために財産を失ったジムは、ボクサー生活においても再三のケガのために敗退を重ねていった。しかし、生活のためにはケガを隠してでも試合に出なければならない……。

そんな悪循環の中、彼の無気力試合（？）に業を煮やしたプロモーターのジミー・ジョンストン（ブルース・マッギル）は、ついに彼のプロボクサーのライセンス剥奪を決定。これによって、彼と彼の家族の生活は一層深刻さを増していくことになった。

復活劇はジョー・グールドの手によって

全盛時代のジムをうまくマネージメントしたのがジョー・グールド（ポール・ジアマッティ）なら、不遇時代、そしてどん底時代のジムを支えたのもこのジョー。大不況の中、容易に仕事が見つからないジムにとって「ライセンス剥奪」は死刑判決にも等しいものだったが、そんなどん底状態のジムに吉報をもたらしたのはジョーだった。その吉報とは、世界ランキング２位のコーン・グリフィンの

対戦相手が急に欠けたため、その「穴うめ」として「被害者」となるボクサー役をつとめろ、というものだった。ボクサーとしての練習はおろか、貧乏のため食事にもこと欠く状態のジムがいきなりリングに上がっても敗退することは明らかだが、試合に出ればファイトマネーをもらえる。そんないかにもみじめな仕事だったが、それでも今のジムにとってはメチャありがたい仕事。

ライセンスは剥奪されたまま、たった１度限りの例外措置としての試合への出場だった、はずだが……。

ハイライトは世界タイトルマッチ！

１度限りの復活劇をジミーに認めさせたジョーは、今度は言葉巧みにジムの世界チャンピオンへの挑戦話を持ちかけた。その説得のポイントはただ１つ。「ジムが勝っても負けても、あんたは儲かるよ」というもの。そしてその目論見どおり、計算高いジミーはこの話に乗り、トントン拍子に商談（？）は進んだが……？

他方、いったん引退したようなジムが挑戦者として登場するなどということは、ヘビー級チャンピオンのマックス・ベア（クレイグ・ビアーコ）にしてみれば論外の話であり、「そんな奴とはやらん！」と叫んだのは当然。マックスは過去にリングで２人も「殺した」ことのある圧倒的パワーの持ち主。したがって、試合がもし行われたとしても、ジムはもってもせいぜい第２ラウンドまで、というのがもっぱらの下馬評だった。

いくら何でもこの挑戦が無謀なことは、関係者はもちろん、多くのアメリカ国民にとって明らかな事実。ケガをしての敗退ならまだましだが、ジムが３人目の犠牲者になるのでは……そう考えた妻のメイ・ブラドッグ（レニー・ゼルウィガー）が、「絶対この試合だけは認められない！」と言い放ったのは当然のこと……。しかし、スクリーン上で展開されるこの映画最大のハイライトシーンは……？　あの『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）のボクシングシーンとは大違いで、こりゃ見ごたえ十分。思わず身を乗り出し、ジムがパンチをくらうと私も思わず「痛い！」と口に出しそうに……。そしてファイナルラウンド、その興奮は最高潮に……。

ボクサーの妻の気持は……？

ボクシングの試合は、見ている方は激しい打ち合いになればなるほど面白いものだし、ノックアウトシーンを見て観客は喜ぶもの。

しかし闘っている本人たちにしてみれば、それは大変な仕事。もちろん誰にでも闘争心があり、闘っている本人は十分納得しているわけだが、たまらないのは、リング上で血を流しながら一方的に打たれ続けている姿を見なければならない妻や子供たち。

心配だからリングの側で見守るというタイプの妻と、夫の試合は絶対見ない、いや見られないというタイプの妻に二分されるはずだが、この映画の主人公ジムの妻のメイは後者。全盛期を過ぎ、ボロボロになりながらリング上で闘っている夫の姿はもちろん、プロボクサーとして順調に出世街道を歩んでいた時も、メイは決して夫の試合をリングの側で見ることはなく、１人じっと家で夫の帰りを待っていた。果たしてその気持は……？

「あの日」もまちから人の姿が消えた！

ジムとベアとのヘビー級タイトルマッチ戦が行われたのは1935年６月13日。今から70年前のことだ。そしてこの日は街角から人の姿が消えたとのこと。

私は四国愛媛県松山市の出身。四国は野球王国と言われ、高校野球の強豪チームが多いが、松山商業高校はその代表格。私が大学３回生の1969（昭和44）年夏の第51回全国高校野球大会の決勝戦は、愛媛代表の松山商業と青森代表の太田幸司投手を擁する三沢高校。

松山に帰省していた私は、その日ずっとテレビにかじりついて観ていたが、延長18回引き分け、翌日再試合となったが、この日の松山はまさに市内から人の姿が消えてしまっていた……。

松山市民のほとんどが、テレビに釘付けとなり、「おらがまち」の代表が勝つことに手に汗を握り、筋書きのないドラマに熱狂していたわけだ。多分1935年６月13日にマディソン・スクエア・ガーデンで行われたタイトルマッチ戦もこれと同じような状況だったのだろう……。

個人か社会か？　公と私

大学における私の「都市法政策」の講義は、いつも民主主義の問題と公と私の議論に収れんされていく。市街地再開発事業は公共性のある事業。だからこそ税金が投入されるわけだが、果たしてその公共性とは……？

このテーマは、すべての公共事業とすべての税金の使い途に通じる根本問題だ。また、最近日本では定職を持たないフリーターやニートの若者が増えている。これも個人的に見れば、それでも食えるのだからいいではないかとなるわけだが、社会的に見れば彼ら、彼女らは社会に対して何の貢献をしているのか、という問題になるはず。

そういう問題意識でこの映画を観ると、全盛期を過ぎ右腕の骨折をはじめとする満身創痍の状態の中、ジムがボクシングの試合に固執するのは何のためか。それは「生活のため」「家族のため」。それは当然だ。しかしジムが一夜限りの試合でカムバックを果たした後は、彼のボクシングの試合は、個人だけの問題ではなくなった。つまり彼のボクシングの試合、とりわけ勝てるはずのないチャンピオンへの挑戦は、経済不況の中で苦しむ多くのアメリカ国民に夢を与える公共的な仕事になったわけだ。

どん底時代にアメリカ合衆国から生活保護のお金を受け取っていたジムは、試合をやったことによってお金が入るとこれを返済していた。チャンピオン戦に臨む前日のインタビューにおける、ある記者の質問は、「それはなぜか？」と問うもの。これに対しジムの答えは実にすばらしいものだ。

その言葉の重みとアメリカ合衆国という国の民主主義の価値をじっくりとかみしめてもらいたいものだ。

彼はなぜシンデレラマンと呼ばれたのか？

ジム・ブラドックがシンデレラマンと呼ばれたのは、彼がチャンピオンを目指して快進撃を続けていた全盛時代の時ではない。多くのアメリカ国民が不況にあえぎ苦しみジム自身も飢えに苦しむ中、そのどん底から再び奇跡のようにはいあがってきたジムの姿を見て、人々は彼をシンデレラマンと呼ぶようになったのだ。

このシンデレラマンという言葉には、幸せをつかみ取ったラッキーな男という意味だけではなく、人々の夢を危険を省みずその身をもって実現してくれた希望の星という意味が含まれている。つまり、彼の勝利は、ジム個人だけのものではなく、貧困に苦しむ多くのアメリカ国民の勝利と考えられたわけだ。

直前まで夫を「死のリング」に送りだすことはできないと考え、試合に反対していた妻のメイだったが、教会に集まり、ひたすらジムの勝利を願って祈ろうとしている多くの人たちの姿を見た時、メイは、はっきりとジムのチャンピオンへの挑戦は崇高な「公の仕事」だと理解したのだった。そして、はじめて試合前の控室を訪れたメイはジムに向かって「私の支えが必要でしょう」という言葉を……。これこそジムが何よりも望んでいたものだった。

アカデミー賞有力候補まちがいなし！

この映画は歴史上実在したボクサーの「伝説」をもとに、強烈に家族愛と家族の絆をアピールする感動作。今から75年前の1930年、アメリカは前年の「暗黒の木曜日」に端を発した大恐慌時代に突入していたが、そんな時代であっても、主人公ジムのような「誇り」が立派に存在していたし、夫と妻、父と子との絆も強固なものだった。そしてまた友情も……。

そんな貧しい時代状況の中で生まれたシンデレラマンだからこそ、家族の絆や人間の絆が大きく失われた今の時代に、より一層の感動を呼ぶのかもしれない。映画評論家の私（？）としては、ラッセル・クロウの主演男優賞、レニー・ゼルウィガーの助演女優賞を含め、この映画が今年のアカデミー賞作品賞の有力候補となることまちがいなし、と今から断言しておこう。

2005(平成17)年６月24日記